

傳心錄

樂府石

下

國

家傳

			三四一三五	和書門
		九	函	
二	三	架	冊	類

庫	文	閣	內	
八二函一〇架		三四一三五	二冊	和書類

內閣文庫		
番號	和	34135
冊數	2	( 2 )
函號	182	298

第二

共二



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

























少集代の田志平はるる。装束もく、骨く不  
及中の中若くは、其時山見く、多く、無き時、  
不新内れ、後和と、物く、信持と、物く、其年  
美く、も、か、る、多、く、先、き、ん、を、言、ひ、板、列、城、下、等  
い、か、る、多、く、年、可、く、及、先、年、先、行、守、り、之、別、り  
か、る、は、也、く、改、く、は、な、物、を、く、人、く、の、保、定、代  
は、攝、正、之、く、も、そ、お、ち、家、代、く、の、く、古、代、の  
中、く、の、雙、ま、る、ら、る、く、攝、正、地、名、く、の、物、名、く、の、  
下、く、の、物、名、く、の、新、禱、く、の、く、も、く、や、る、は、此

新禱く、病、氣、も、也、り、く、く、板、中、の、保、定、代、  
く、の、山、家、山、伏、の、新、野、名、く、の、定、る、新、内、く、の、  
必、り、お、し、ま、せ、り、石、名、一、石、板、名、く、の、お、な、り、名、  
は、新、禱、ま、り、く、の、く、の、く、の、代、く、の、く、の、新、禱、中、長  
橋、高、若、田、白、川、あり、神、祇、官、く、の、新、日、の、名、  
出、る、少、伏、乃、胡、洲、と、の、新、り、の、靈、異、驗、可、く、の、く、  
若、く、無、し、の、古、法、法、を、知、識、と、い、は、ん、た、る、  
い、く、く、の、く、の、胡、洲、を、誠、乃、名、く、の、く、  
そ、時、く、天、を、れ、佛、く、の、く、の、く、の、棋、家、大、長、足



たのむ可いんれた...  
新...  
紫...  
妖...  
リ...  
起...  
た...  
を...  
能...

俗人...  
是...  
余...  
以...  
作...  
日...  
中...  
る...  
傳...











り不流撥おとさるるも年々弱少く自今  
係乃出家したる一合時をむらむらと  
ぬらさるる思わらるるあらんや又共業  
る大古 天より割物さそりし先角福  
ぶれを止ん 伊代上はる何の心所  
しをしを文信止せしむらむらむら改  
され下よ之の白ふ人の心むらむら  
一なる是しに人柄さるる家お建候これ  
候ゆしせしむらむらむら今共業むら

小き枝の細根の根はるるあらんや  
よきなすむらむらむらむらむら  
の人の根おむらむらむらむらむら  
事なるしに白ふの根はるるあらんや  
むらむらむらむらむらむらむら  
物ぬらむらむらむらむらむらむら  
とらむらむらむらむらむらむらむら  
乃是解とすのむらむらむらむらむら  
人情のむらむらむらむらむらむら



是より先とけりんを法師のいふより多く  
相て申分なきし人又首を二言解く事おし  
るしんわ能きるしんを能くを所と考へて之  
下一急少く相の即の國一を東に  
係る事ありて氏乃法家の考ひとなりみ  
と俄に法なるるに民のくく又正教  
此言ふしおちし一戸知方乃法なるるに  
法なるるに却て政の好となり是を相く  
之の志のいふ能く出郡より寺社より何なり

ありとのいふるに相ら一考一法なるるに  
右に法と申しませる人よ止め申し人  
止めは一人り止めは法なるるに  
是れおちりしに此物なるるに  
何事なるるに相ら一考一法なるるに  
人あき法なるるに相ら一考一法なるるに  
いふ法なるるに相ら一考一法なるるに  
是れ思ふに相ら一考一法なるるに  
いふ法なるるに相ら一考一法なるるに



亡きものなほもたつたしつゝもなほいふなり ○ 世にまかり  
胸のなかのいふ人ハこそあはれとてなほいふなり  
信ふにたゞ 百例 一層とてなほいふなり 相前後  
とせり 夢とてなほいふなり 是れとてなほいふなり  
きんとのとてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
そととてなほいふなり 上れたとてなほいふなり  
いふなり 上れたとてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
の夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり

難言はたふとてなほいふなり 今とてなほいふなり  
大いなるなりとてなほいふなり 信とてなほいふなり  
夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
いふなり 又たつたとてなほいふなり 上れたとてなほいふなり  
中層とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり 又たつた  
胸とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり 又たつた  
いふなり 夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
まづとてなほいふなり 夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり  
夢とてなほいふなり 下れたとてなほいふなり 又たつた



伊為の中は平しく日三はは義なり長と云ふ人  
如くは下は庸と制し家も業も上り上世政の  
徳化も礼もきい礼儀とり人も礼も民なり  
好む礼儀なるは人より人ともちる民のきよき  
上も驕りさうは人の心を志いたははる村と云  
ははるましの儀よとあるまの出来儀も因縁  
ふすまのましくうたをさひてるまの礼の教  
そし中りの礼と云ふはふりふり後物あれは  
世に氏も其生を修むる徳性く入世の徳性を

如く孔子の教ふく吾不欲民不盗ともいふ  
是なりおの人の心をなむらばあふりたれり  
なやすくはれりいふくはくはのあつた人  
家におもふ者後にもあつたりしををを  
下へおもふ家におもふ武のしりもあつたり  
となしし物もしてさしはるるは礼の  
あつたりし物もしてさしはるるは礼の  
とさしはるるは礼の  
人をさくはるるは礼の











今村の存ありしに  
改換のすう年圓と経る  
いり部下り中後年  
此神上ありしに  
尸改の上より

○是年より  
まゆゆきさ  
中後より  
無しんき

了るは  
久ハ改  
すり  
そ介平  
い  
丁  
失礼  
即  
即



















乃乃の御信のその物向をきこるる御信は  
是を御信するは唯の御信の御信は  
御信と云ふは志すは御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は

一 物は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
是の御信は長柄の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は

御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は  
御信の御信は御信の御信は御信の御信は御信の御信は



其いたる所而白く其字えん此亦旅なり也  
今見て留るわくは信とらへ元樹のまゝの  
風吹れぬをと詠れよ此れ此の原形也  
旅はよき中なり 推して打首の都  
幸討の此を先代より作後より作可なり  
書物より合得なり 政に中より夜何れも  
其の事より詠事なり此れ此の事なり  
下討をせよとて法絶と打せりし政は性神を  
こめく之をなす 和歌をさへしきまを不測定一過也

海一人のりて打せ討させは信とらへ此も  
可なり 其の事なり 仲より月と遠くを  
近の息なり 玉下は是も此も  
下通にふなり 何れも此も此も  
と其情なり 言なり 言なり 言なり  
伊是代定なり 詠なり 詠なり 詠なり  
世は入るなり 詠なり 詠なり 詠なり  
明なり 詠なり 詠なり 詠なり  
詠なり 詠なり 詠なり 詠なり











ふらふらと一歩して國の心は  
海にうつりておぼろげに  
見ゆる所をまよひて  
今も先達をばたき  
他より出づるも  
是れをばたき  
今も先達をばたき  
他より出づるも  
是れをばたき

と申す列に  
他より出づるも  
是れをばたき  
今も先達をばたき  
他より出づるも  
是れをばたき  
今も先達をばたき  
他より出づるも  
是れをばたき  
今も先達をばたき  
他より出づるも  
是れをばたき















汗流先代は異あく礼儀なるは名格式の所と  
用ひしもの何しと云ふ事余詳伝して禮申  
し余儀をなす名な物れを改むるに改むる  
也上下をぬれたるは儀の所ははるる  
と改ん申す事一と志す一に意をなす  
しと云ふ事及に申す事と改むる  
石ころの事余は思ひしと改むる  
余儀の失れしと改むる事余は思ひし  
儀の事余は思ひしと改むる事余は思ひし

式法用と物を出さし衣と着る事余は思ひし  
おのり事余は思ひしと改むる事余は思ひし  
考へん事一と改むる事余は思ひし  
と改むる事余は思ひしと改むる事余は思ひし  
一と改むる事余は思ひしと改むる事余は思ひし  
さる事余は思ひしと改むる事余は思ひし  
師先代の作儀を用ふ事余は思ひしと改むる事余は思ひし  
中記の事余は思ひしと改むる事余は思ひし  
物余は思ひしと改むる事余は思ひし



一 武志は傷みなりし故をてく武志の  
故となりし事をおまじ梅とて核を入れたもの  
傷まりの性神と激し下知月よりの利を故と  
志すまじし故に武志傷の時毎一は月とし  
ふ時くをさ多く元すしゆりふまむ化中くそ  
神を死せし事いれん掛但下れそのことおせし  
り改めたるも余となけうらむもとくせさと  
すしゆりしゆりく支死す何し何し母あはまはし  
通るくまふし讀りたう

一 尸次何の故に諸君は武志をりしゆり下り  
将も末節より元そのことゆきおしゆりゆり  
てすしゆり尸次しゆりあまは元改作とすし  
物に長物ゆりおししゆり長物ゆりゆりゆり  
元人におれたるゆりゆりゆりゆりゆり  
元先づゆり長物ゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり











しんりん年一己の家出をゆきまらふにあつて  
着ると朝夕合ふるやあつて侍とてしんりん  
しんりん物を取人の能くしんりん暮れしんりん  
取仕下しんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
何れも取仕下しんりんしんりんしんりんしんりん  
紫雲の取仕下しんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん

しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん  
しんりんしんりんしんりんしんりんしんりんしんりん























予の如き威威の如き... 海の舟をわ  
ふけりし日色... 今一... 海の舟をわ  
ふ

有酒陽信伊代は... 序... 此の如き  
如くぬゆふ... 下信... 此の如き  
系式部... 此の如き  
式部... 此の如き  
此の如き... 此の如き  
此の如き... 此の如き

予の如き威威の如き... 海の舟をわ  
ふけりし日色... 今一... 海の舟をわ  
ふ  
有酒陽信伊代は... 序... 此の如き  
如くぬゆふ... 下信... 此の如き  
系式部... 此の如き  
式部... 此の如き  
此の如き... 此の如き  
此の如き... 此の如き







下徳式部七中  
中ノ高きニ傳ハルニ人ノ  
をせりけり

有徳度様是  
上中ノ高きニ傳ハルニ人ノ  
をせりけり  
元振神門ノ威ハルニ人ノ  
をせりけり  
比布石伝ハルニ人ノ  
をせりけり  
志ハルニ人ノ  
をせりけり  
家代ノ神トシテ人ノ  
をせりけり  
世ヲ傳ハルニ人ノ  
をせりけり

心をくまれと云ふ  
おたか  
し  
破  
中  
美  
行  
人



一これに於ては之に止るべき人少し計りては  
しるすに物と人將也——わがま  
なれはと思止るべきなりと云ふ——たゞ  
と爲るべき事此人の心より物れはま  
あはれ代せしむるべき事なり——此れ  
之れを以てしるすに止るべき事なり  
うんそを能く計りては之を以てしるす  
んとや——計りては之を以てしるす  
はれ——文なり——十の十なり——信思ふ——

て此の心計りては之を以てしるす  
よれと物なり——此の心計りては之  
よれと物なり——此の心計りては之  
大なりははれを人より物なり——  
副役と云ふは之を以てしるすに  
昂せらる——別々の心計りては之  
代らぬものなり——此の心計りては  
なすものなり——此の心計りては  
可なり——此の心計りては之を以てしるす







































よるうのぬかきふりて大なる出入りあり  
此の事もなほなほありて一なるもなほあり  
ゆゑにふりて先ゆく中後より大なる通りて  
ゆゑの上より何れも身高く生れぬる男は  
またなほしなほありてなほありてなほあり  
さゆゑにふりてなほありてなほありて  
おのゝ伝へてなほありてなほありて  
てなほありてなほありてなほありて  
なほありてなほありてなほありて

まゝに名勝の地ありてなほありて  
なほありてなほありてなほありて  
武士色もなほありてなほありて  
街のなほありてなほありて  
なほありてなほありてなほありて  
位階もなほありてなほありて  
なほありてなほありてなほありて  
なほありてなほありてなほありて  
なほありてなほありてなほありて











はよふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた

後のまのよしとあつたしそいそい  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた  
よふも入るゝふくも 祿は終に例命の  
まらぬ火あふん載らすしや 物もあつた







すもももふさふさの庭に花をまきしりて  
うらやまの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて

こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて  
こころの影をまきしりて







予の同僚となり、修験の由緒を尋ねて  
物事とれど、説く事、一、由のれ、  
ふ

一、は、長、易、を、お、儀、を、  
我、お、の、ゆ、り、余、乃、事、中、を、お、お、  
是、と、是、ん、余、ん、お、お、  
人、れ、為、知、な、り、  
御、は、何、の、名、を、何、し、  
説、く、は、い、ま、此、事、を、知、く、

先、言、く、な、せ、た、  
何、し、  
今、  
と、い、  
し、  
ん、  
す、  
尸、  
し、  
の、











久々うひ中居る中へてりて  
とててててててててててて

天明三年十二月





